

愛知医科大学学報



学生一人ひとりに授与された
Student Doctorのワッペン

2019年度白衣式挙行
(関連記事10頁)

＝ 第156号 ＝
2019. 10月

愛知県長久手市岩作雁又1番地1
〒480-1195

学校法人 愛知医科大学

愛知医科大学ホームページアドレス
www.aichi-med-u.ac.jp

■ 主な目次 ■

令和2年度予算編成方針	2
令和元年度総合防災訓練実施	4
シミュレーションセンターの拡充	9
2019年度白衣式挙行	10
医学部地域包括ケア実習体験記	13
愛すまいる始動	19
Smile ～スマイル～	31
教育・研究最前線	33

令和2年度予算編成方針

I 基本方針

<現状分析>

令和元年9月に受審した日本医学教育評価機構(JACME)による国際基準による医学教育分野別評価基準の結果が待たれるところですが、既に本学の教育は、非常に高い外部評価を得ています。

その証左として、英国の教育専門誌、タイムズ・ハイヤー・エデュケーション「THE世界大学ランキング日本版」は、従来の大学ランキングでは見えにくかった「教育力」に着目し、日本の大学の真の実力を世界に発信していますが、その2019年版の教育リソース分野で本学は13位(私立医大2位)にランクされました。この教育リソースとは、学生一人あたりの資金や教員比率などのデータから、どれだけ充実した教育が行われている可能性があるかを評価するもので、本学の潜在力、可能性が高く評価されたと言えるでしょう。

<令和2年度展望>

目を令和2年度に向けると、公益財団法人大学基準協会による大学評価の受審が控えています。「内部質保証システムの有効性に着目した評価」に対応できるよう、システム構築に向けた検討を徹底し、万全の体制をとらねばなりません。これを機に本学の教育改革を一層推進し、更なる質的転換・向上を図っていく必要があります。

また、本院は、日本医療機能評価機構の「一般病院3」の認定評価を受審することが決まっています。この目的は単に認定を受けるだけではなく、特定機能病院におけるガバナンス体制の強化及び安全で適切な医療の提供を定常化し、高度の医療安全の確保を図るための契機としようとするものです。

今課題となっている働き方改革の視点からは「ワークシェア」と「ワークシフト」の実現が、職員間のコミュニケーションを高め、医療安全と医療の質向上に貢献するとの指摘があり、職務満足度の高い病院は患者満足度も高いことがこれまでの種々の研究でも明らかにされています。新病院建設のスローガン(行動指針)の一つが「元気ホスピタル(あなたを元気にする、私も元気になる)」でした。「患者さんに元気になって頂くことにより、私たち職員も元気になる。」という意味です。このスローガンが目指すところを今一度確認し、その実現に向け最大限の努力を継続していかなければなりません。

<国の動向とその対策>

2019年5月の「地域医療構想に関するワーキンググループ」において、厚労省は「地域医療構想」、「医師の働き方改革」と「医師偏在対策」は相互に関連があるため三施策を「総合的に進めていく必要がある」ことを提案しました。これは2014年の医療介護総合確保法以来、地

域医療構想は、公立・公的病院の地域再編を軸として進捗しつつある中、医療機関の地域再編等の方針を、新たに登場してきた医師の働き方改革や医師の偏在対策との間で整合性を取る必要が出てきたことによります。例えば、「地域に救急病院が複数あり、それぞれの病院で救急応需体制を取れば、医師の時間外労働短縮が実現しない」となれば「一部の病院に救急機能を集約化する」などしなければ、「働き方改革」は実現できません。また、医師の偏在対策では、医師が他の地区からの移動時間も含めた調整が必要となるなどこの三施策は相互に影響を及ぼし合うために、三位一体改革の必要性を厚労省は指摘しています。

こうした動向の中、地域医療構想は全国335ある構想区域(二次医療圏)毎に2025年(団塊の世代が後期高齢者となる)の人口動態に応じた病床推計量に基づき、これまでの一般病床と療養病床という病床機能を「高度急性期」、「急性期」、「回復期」、「慢性期」とに精緻に区分するとしています。構想区域における病院の再編統合やダウンサイジングが公立・公的医療機関をターゲットに、がん領域別手術や災害医療等17項目の分析の下、項目別にきめ細かく再編統合が行われようとしています。こうした施策の成否を握る地域連携は、不可欠ですが簡単なことではありません。地道な活動を重ね、ここまでやるのかと言われるところまで成し遂げて、やっと信用と信頼の関係が構築できるものと考えられるところです。確かに高度な専門医療には素晴らしい価値がありますが、我々が直面する高齢化社会では生活の場に移行するための医療も必要です。今こそ積極的に地域医療へ参画することが求められます。

ところで「医師の働き方改革」では、2023年度末までに時間外労働時間1,860時間超えを解消しなければなりません。現状では医師全体の1割が該当すると言われていています。更に、その10年後の2035年末までには地域医療確保のための暫定特例労働時間1,860時間の解消も迫られます。具体的には960時間以上1,860時間未満の時間外労働も解消しなければなりません。その数は医師全体の3割、6万人が該当すると言われていています。これを本学に当てはめ解決していくためには、いったい何人の人手が必要になるのでしょうか。

検討してきた諸課題への対応には、そこに耐えられる経営基盤の構築が最重要となります。

<総括>

私立医科大学の中のトップ10を目指す本学は、学内外の大きな変革期を乗り切り、永続的な発展に向けた軌道に乗れるかどうか、ここからの数年間が正念場です。持続可能な盤石な経営基盤の構築のため、最近のトレンドとなった指標である経常収支差について、私立医科大学

の平均を上回る水準を早期に達成しなければなりません。その端緒となる極めて重要な令和2年度予算編成となります。

<令和2年度予算コンセプト>

ACCUMULATION & INNOVATION

(チカラを蓄え、改革に挑む)

Ⅱ 重点事業

各編成単位においては中長期的な観点に立った次の「重点事業の目的」に合致した計画立案を求めるとし、定量的な成果が見込める事業を優先します。

- 1 教育機関としての成果が期待できる事業
 - 2 研究支援体制の強化に係る事業
 - 3 病院の機能活性化推進事業
 - 4 医療収入・その他の増収策の立案
 - 5 地域医療連携に関する事業
 - 6 医療情報システムの更新事業
 - 7 自己点検・評価，病院機能評価受審関連事業
 - 8 私立大学等改革総合支援事業対策
 - 9 省エネルギー対策の推進事業
 - 10 創立50周年記念事業
- ☆ イノベーション推進事業（単年度・中長期）

☆ 今後の発展へのイノベーションを促進するため、理事長の下、組織的かつ横断的なプロジェクトチームによるロングタームで取り組む事業を指します。1から10の事業目的との重複の場合もあり得ます。



令和元年度総合防災訓練実施

愛知医科大学消防計画・大規模災害対策マニュアル及び愛知医科大学病院事業継続計画に基づき、令和元年10月17日（木）に教職員、学生合わせて約1,000人規模の総合防災訓練を実施しました。

今回の訓練は南海トラフ地震でマグニチュード9.0、震源地は熊野灘沖フィリピン海プレート、南海トラフとして、長久手市で震度6の地震を観測、病院機能は一部麻痺しているものの、患者受け入れは行うという想定で行われました。

訓練内容については大学、病院、法人本部と3部門に分けて行いました。大学は学生避難誘導訓練や尾三消防本部の協力により、消防隊員の指導で煙ハウスや応急処置訓練などの体験型の訓練や「医療人としてできること入門編」と題して、シミュレーションゲームを行いました。法人本部ではライフラインの被害状況調査・報告や災害備蓄品の搬送訓練等を行いました。更に非常用設備等の視察を行い、被災時に施設を支える設備がどこにどんなものがあり、どのくらいの期間機能するのかなどを目で見てその重要性を再認識しました。



病院ロビーでの訓練の様子

また、病院では大規模な患者受け入れを想定しトリアージなどの実働訓練を行いました。電子カルテではなく紙カルテを使うなど普段とは違った形でも対応できるような訓練を行いました。更に事業継続計画（BCP）に基づき、夜間を想定したBCPシナリオ訓練を行いました。自分たちの安全報告、緊急検査等が可能か、夜間の緊急時にどのような検査ができるかなどを確認しました。

この訓練を終え、学生からは「煙ハウスの体験をしたとき、こんなにも前が見にくく歩きにくいことに驚いた。」などの感想があり、学生にとっても良い経験になりました。また、災害対策本部の検証会では、BCPに向けて新たな課題も見つかりました。問題点を解決し、いざという時に役立つ訓練としていくため、今後もより一層実効性のある訓練の実施に努めてまいります。

近年では、被災地での被害状況がしばしば報道されていることもあり、教職員及び学生の防災に関する危機意識が高まってきていることから、より実りある防災訓練を行っていきます。



煙ハウスを体験する学生たち

わくわく体験リニモツアーズ 「“コードブルー”の世界 救急医療について学び、 考えてみよう！」開催

東部丘陵線（リニモ）の沿線施設の魅力を満喫し、学び楽しむイベント「わくわく体験リニモツアーズ2019」（東部丘陵線推進協議会主催）が、近隣に住む小学生の児童を対象に開催されました。

本学においても、令和元年8月26日（月）、27日（火）の2日間で「“コードブルー”の世界 救急医療について学び、考えてみよう！」と題した体験講座を開催し、多くの児童及びご父兄にご参加頂きました。

体験講座では、ドクターヘリの見学会、ドクターヘリに関する講演会、質疑応答が行われましたが、幸いにも全日程でドクターヘリの見学会を実施することができました。

参加者は機体の迫力を間近で感じ、フライトナース達が実際現場に駆けつける際に背負うリュックの重さを体感した子供達は驚いていました。

講演会では、本院のフライトドクター及びフライトナースによる講演がクイズ形式で行われ、ドクターヘリや仕事内容について説明があり、参加者は皆、普段聞けない医療現場の話やドクターヘリの話について熱心に耳を傾けていました。

最後には、参加者全員にドクターヘリ（本学オリジナル）の特製ピンバッジを配布し、体験講座は盛況のうちに終了しました。



ドクターヘリ見学会



講演会

2019年度愛知医科大学公開講座終了

令和元年9月7日（土）・14日（土）・21（土）・28日（土）の計4回にわたり開催された2019年度愛知医科大学公開講座が終了しました。

今年度の公開講座は、身近な病気の予防法や治療方法などについて学んで頂くため「健康で生きるために」をテーマとして開催し、開催期間中は、近隣住民の方を始め、4日間で延べ875名の方々にご参加頂きました。

また、4日間全てに出席頂いた84名の方々には、最終日となる28日（土）の講座終了後の閉講式において、それぞれ修了証書が授与されました。

本学では、今後も地域の方々の健康に役立つ公開講座を企画・運営していきますので、多くの方のご参加をお待ちしております。

愛知医科大学公開講座（尾張旭市連携事業）

令和元年8月29日（木）午後2時から、尾張旭市のスカイワードあさひ5階くすのきホールにおいて、尾張旭市との連携公開講座が開催され、医学部衛生学講座の鈴木孝太教授が「生活習慣の改善を目指して～行動変容の理論と実際～」と題して講演を行いました。【写真】

講師を務めた鈴木教授からは、生活習慣とりわけ喫煙と疾患の関係、食事、運動、睡眠についてお話があり、特に鈴木教授が大学で産業医としても活躍されている体験談などについてユーモアを交えながら話され、参加者からは「わかりやすい内容で具体的な方法を教えてもらったので実行していきたい。」「大変役立つ健康維持の勉強ができ感謝している。」などの意見を頂き、楽しみながら健康について学べる講座となりました。



愛知医科大学公開講座（瀬戸市連携事業）

令和元年9月9日（月）午後1時30分から瀬戸市やすらぎ会館5階大集会室において、今年が2回目となる瀬戸市との連携事業として公開講座が開催されました。【写真】

講師を務めた臨床腫瘍センターの三嶋秀行教授からは、がんの種類やがんのリスク因子と5年相対生存率、がんになってしまったからの治療方針とその決め方などについてお話がありました。それぞれの治療方法の良い点悪い点を良く理解した上で、患者自身のQOLをなるべく低下させないように治療を進めることが重要であると述べられました。

また、分子標的薬の効果、保険適用診療と保険適用外診療の特徴などについてもお話があり、医師と患者の壁を取り除いて良く意思疎通を図りながら治療していくことが大切であると強調されました。参加者からは、「良



い話が伺えた。」「心の準備が必要だという言葉が印象的であった。」などの感想があり、大変盛況な講座となりました。

愛知医科大学公開講座（長久手市連携事業）

令和元年10月31日（木）午後1時30分から長久手市保健センター3階会議室において、長久手市との連携公開講座が開催され、学際的痛みセンターの井上真輔准教授（特任）が「痛みの専門家による“身体の痛みの上手な対処法”」と題して講演を行いました。

講師を務めた井上准教授（特任）からは、多くの方が悩みとしてお持ちの「慢性の痛み」について、痛みのメカニズムや感じ方、急性痛と慢性痛の違い、痛みのある時の対処方法などお話しがありました。アメリカと比較すると遅れていると言われる日本の痛み治療においても、国内トップクラスである本学の学際的痛みセンターの多職種による治療は、痛みに苦しむ方々の一助となっており、痛みを負けない身体づくりのために必要な運動方法について、アドバイスを踏まえながら、参加者が実



スクワット指導風景

際にスクワットやもも上げを行い、有意義な講座となりました。

科研費獲得支援セミナー開催 ～採択される科研費申請書の書き方のコツとは？～

令和元年9月18日（水）・20日（金）の2日間、大学本館203講義室（18日）及び202講義室（20日）において、科研費獲得支援セミナーと題して、科学研究費助成事業（科研費）への応募者に対し、採択される申請書の書き方、コツなどについて、実際に科研費を獲得した本学の教員から講義が行われました。

9月18日の講義は、皮膚科学講座の高間寛之講師、看護学部の谷口千枝講師、研究創出支援センターの吉川和宏特務教授、9月20日の講義は、内科学講座（肝胆膵内科）の伊藤清顕教授（特任）、内科学講座（神経内科）の岡田洋平准教授がそれぞれ担当し、多くの教員等が科

研費獲得を目指し熱心に聴講しました。

例年外部から著名な講師を招聘して講演会を開催していますが、今年度は、身近な教員からの講義を聴くことで、科研費申請への関心を持ち、申請への動機付けとすることを狙いとして開催されました。また、各教員からの講義後には、総務部研究支援課の加藤広悟主事から、科研費の申請方法や事務的な注意点についての説明が行われました。講義中には出席者から多くの質問が寄せられる等、有意義なものとなりました。

今後も、研究活動の一層の活性化と科研費を始めとする競争的資金の獲得を推進していきます。

令和元年度採用事務職員内定式挙行

令和元年10月1日（火）午後3時から大学本館4階役員会議室において、令和2年度採用事務職員内定式が挙行されました。

式では、内定者2名に内定証書が授与された後、島田孝一法人本部長から「本学は、医科大学の中では歴史が浅く、大変な苦勞の中で生まれた学校です。経営がうまくいかない時期もありましたが、新病院の建設やキャンパス再整備を行い、医療福祉建築賞や省エネ大賞も頂いている良い病院です。新しい時代の病院・大学というものを運営していく上で、あなた方は大変良い時期に入ってきました。非常に期待するものがありますので、是非頑張ってください。」とあいさつがあり、午後3時30分ごろ式は終了しました。



内定者と記念撮影

執行部SD及び事務系管理職SDを実施

令和元年8月26日（月）に病院の経営や人材マネジメントのコンサルティングを行っている株式会社日本経営の橋本竜也氏を講師にお迎えし、執行部SD及び事務系管理職SDを実施しました。

午前に行われた執行部SDは、理事長及び常任理事の7名を対象とし、教職員満足度の向上が経営にもたらす効果と教職員満足度調査の結果の活用方法について理解を深めました。橋本氏からは、本学で今年6月に実施した調査に対するご意見と調査結果に対する取り組み事例をご説明頂きました。

午後に行われた事務系管理職SDは、今年度新たに管理職に昇任された方を中心に6名が参加し、グループワークなどを通して管理職に求められる現場を動かすリーダーシップについて理解を深めました。



執行部SDの様子

受講者からは、「各個人、各業務レベル等に合わせた育成方法を実施していきたいと思う。」などのコメントがありました。

2020年度大学院医学研究科入学試験 第71回論文博士外国語試験実施

令和元年9月27日（金）、本学本館711特別講義室において、2020年度大学院医学研究科入学試験第1次募集及び第71回論文博士外国語試験が行われました。合格者数は、大学院医学研究科入学試験が8名、論文博士外国語試験が3名となりました。大学院医学研究科では、入学定員に満たないことから、第2次募集を予定しています。これまで社会人入学制度や学納金減免制度の拡充など

を行い、大学院教育を受けやすい環境を整えてきましたので、研究意欲の高い方が多数応募されることを期待しています。

なお、大学院医学研究科入学試験第2次募集及び第72回論文博士外国語試験は、令和2年2月7日（金）に実施予定です。

2020年度大学院看護学研究科入学試験実施

令和元年9月4日（水）2020年度大学院看護学研究科入学試験が行われました。合格者数は、修士論文コースが3名、高度実践看護師（診療看護師）コースが6名となり、入学定員に満たないことから第2次募集を予定しています。

本研究科では、これまで医療等の現場で活躍されている方々が、退職したり休職したりすることなく学べるよ

う、平日の夜間や土曜日などにも講義、研究指導等を行っています。更に、勤務や育児などの事情により標準修業年限での履修が困難な学生を対象とした「長期履修制度」を導入し、社会人がより学びやすい教育環境を整えています。（高度実践看護師[診療看護師]コースを除く。）

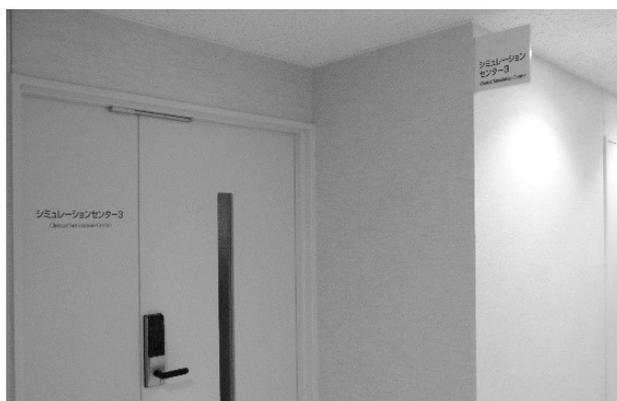
大学院看護学研究科入学試験（第2次）は、令和2年2月6日（木）に実施予定です。

シミュレーションセンターの拡充

令和元年6月末に病院C棟8階に、「シミュレーションセンター3」が設置されました。【写真】

シミュレーションセンターは、医学部の附属施設として、平成27年4月に「シミュレーションセンター1・2」がC棟6階に開設されましたが、利用者数はこの4年間で年々増加しており、平成30年度には12,000人を超えました。シミュレーションセンターの利用は、医学部のアクティブラーニングはもとより、看護学部の演習、病院の看護部研修のほか、卒後臨床研修センターや各診療科など、幅広い分野での利用が増えています。そのため、申込管理や会場設営などが煩雑になるとともに、カリキュラム改革に伴い学生が自由に練習できる場所の更なる確保が必要になったことなどを踏まえ、「シミュレーションセンター3」の増設となりました。

シミュレーションセンター3は、教授室フロアに位置しており、学生や教職員の出入りが増えることとなりますが、学生及び職員の質の向上のための教育資源として



の活用について、なお一層、ご理解・ご支援を頂きますようお願いいたします。

また、シミュレーションセンターには専任教員がおり、シミュレーション教育プログラムの作成や指導者育成の企画相談も随時受け付けておりますので、いつでもご連絡ください。

2019年度白衣式挙行

令和元年10月26日（土）午後2時から大学本館たちばなホールにおいて、2019年度医学部白衣式が挙行されました。

白衣式では、共用試験（CBT,Pre-CC OSCE）に合格し、臨床実習への参加及び後期課程への進級が認められた医学部4学年次生に対して「Student Doctor」の称号を授与します。学生は新しい実習衣を身に付け白衣式に臨みました。

本式では初めに、若槻明彦医学部長から、臨床実習に臨む者としての心構えについて話があり、代表者へStudent Doctor証書が授与されました。引き続き、石橋宏之教務部長を始め、6名の臨床医学系教授から学生一人ひとりにStudent Doctorのワッペンが授与されました。

次いで、佐藤啓二学長、藤原祥裕病院長、井上里恵看護部長に加え、愛知医科大学同窓会愛橋会から浅井富成理事長、一昨年度本学を卒業し研修医2年目の阿藤文徳医師からも激励のあいさつがあり、最後に、学生代表の勝又蒼穂さんが宣誓文を読み上げ、全員が復唱するとい

う形で学生宣誓が行われました。この宣誓文は、これから臨床実習に臨むに当たっての心構えなどを事前に学生自身がグループワークを行い話し合っ

て作成したものであり、自分たちで考え、言葉にすることで、自らの臨床実習への意識付けや行動規範とするものです。



学生代表の勝又さんによる宣誓

また、白衣式終了後、たちばなホール壇上において記念撮影を行い、その後、レストランオレンジで開催された教員との懇親会では、これから始まる臨床実習に向けて、実際の現場の声を聞くこともでき、学生それぞれが決意を新たに次のステップを踏み出しました。

学生表彰

令和元年8月5日（月）から8月19日（月）にかけて関西医科大学を主幹校として開催された第71回西日本医科学学生総合体育大会において医学部6学年次生の高橋周治さんが陸上競技男子部門100mで優勝しました。また、医学部3学年次生の松村育弥さんが水泳競技男子部門200m個人メドレー及び200m自由形の2種目で大会新記録を樹立し、優勝しました。

また、令和元年8月6日（火）から8月8日（木）にかけて岩手医科大学を主幹校として開催された第34回全日本医科学学生アーチェリー競技大会において、医学部5学年次生の高橋大地さん、大石紗代さんがシングルラウンド部門で優勝しました。更に、団体では男子の部（高橋大地さん、弓削隆洋さん、渡辺裕斗さん）及び女子の部（大石紗代さん、大島美月さん、堤明日香さん）で優勝しました。

これを受けて、10月30日（水）役員会議室において、



佐藤学長、若槻医学部長と記念撮影

他の学生の模範となったとして佐藤啓二学長から表彰状等の授与が行われました。

今後も、文武両面で表彰される学生が続くことを期待します。

令和元年秋の交通安全講習会開催

令和元年10月21日（金）午後6時から大学本館205講義室において、名東警察署交通課長の平岡友幸警部を講師に迎え、医学部・看護学部の学生を対象とした交通安全講習会が実施され、66名の学生が参加しました。【写真】

始めに「愛知県は16年連続で交通事故死全国ワースト1位となっており、脱ワースト1位を掲げて各種取組を推進中です。」と説明があり、続いて、愛知県警において警察官の指導員クラスを対象に行われた講習会の内容を収録したDVDを視聴しました。多くの事故映像を事例に行われた交通心理士による「事故のメカニズム」の解説は、「周辺視野」、「有効視野」、「中心視野」といった人間の「目の特性」によるものや、通り慣れた道だから起こる「思い込み」によるものが事故原因であると説明がありました。また、スマートフォンのゲームやLINEをしていたことが原因として発生した事故映像もあり、学生にとっても身近なツールが、重大な事故を引き起こしていることを理解する貴重な機会となりました。



講習会のまとめでは、認知ミスの原因として「わき見」、「あせり」、「込み」、「漫然」、「加齢」の五つが紹介され、「日頃から正しい運転習慣が大切」であることや、必ず「①認知、②判断、③操作」のサイクルを意識することなどが強調されました。毎年春と秋に実施している当講習会を通じ、学生一人ひとりが交通安全に努めてくれることを期待します。

第46回愛知医科大学医大祭「Amuser.」

令和元年11月2日（土）・3日（日・祝）に今年度の医大祭が開催されます。

新しい時代とともに、今までとは違った新しいことに挑戦し、学生一人ひとりが楽しみ、地域の方々も楽しめることができる医大祭を目指し、今回の医大祭テーマを「Amuser.」にしました。

普段は勉学に励み、日々努力し続けている学生達が、年に一度の医大祭で自己や他者を楽しませられる機会を作ることを目標に、企画やイベントを作っています。

愛知医科大学が今まで以上に地域に根ざした大学、地域密着医療を提供する病院となっていくためにも、ぜひより多くの地域住民の方々に足を運んで頂き、一緒になって楽しんで頂けたらと思っております。



【主なイベント紹介】

☆期間中開催

- ・模擬店（15店舗）
- ・HIAMU企画（薬膳、魚釣りゲーム等）

☆2日（土）

- ・お笑いライブ 15時開演（要整理券：当日10時から配布）
- ・野外ライブ 10時～
- ・病院イベント（ハートフルコンサート）
- ・看護イベント（わくわく!!ちびっこ医師・看護師体験）
- ・学生運動会（フットサル大会）

☆3日（日・祝）

- ・リサイクルマーケット&スタンプラリー
- ・学生イベント
- ・献血・骨髄バンク
- ・防災・減災セミナー
- ・全日本プロレス 14時開始
- ・学生運動会（ソフトボール大会、テニス大会）

1 学年次早期体験実習報告

文部科学省は早期体験実習を、「学生が医学部に入学後早期の段階で、病院等医療の現場で直接的体験（介護体験実習等）を通じて、医師等を目指す動機づけ、使命感を体得させること等を目的としたカリキュラム改善の試み」と定義しています。本学では、1 学年次から4 学年次までに渡って、いくつかの臨床実習を実施しています。

1 学年次では主に、「医療従事者を知る」ことを目的に、早期体験実習を1-A～1-Cの3段階で準備しています。まず、臨床実習に安全かつ積極的に参加できるよう、現場で体験可能な技術を修得するための1-Aシミュレーション実習を学内で実施し、その後、1-Bで大学病院の看護師につき、シャドウイングを行います。ここでは、患者さんとのコミュニケーションの取り方、医師と看護師の間を始めとする多職種連携の様子等を学びます。



1-Aシミュレーション実習の様子

次に、1-Cでは、大学病院や地域の病院・医院等で医師につき、シャドウイングを行います。ここでは、主に医師の役割と患者さんとのコミュニケーション、多職種連携を医師の立場から学び、医師という職業について考える機会としています。

各々の臨床実習を体験後、学生はSignificant Event Analysis (SEA) という手法の振り返りレポートを書いています。これは、心に残った出来事を取り上げ、なぜ心に留まったのか、どのような学びがあったか、今後の課題についてまとめるものです。このレポートにより、学生は、自らの体験に意味づけをすることができます。



1-Bシミュレーション実習の様子

単に感想文で留めるのではなく、自己の行動を振り返り、課題を見出すため、学習の継続性にも繋がります。今年度からは、これら1-Aから1-Cの記録物はポートフォリオとして蓄積することを開始しました。2 学年次の外来案内実習、社会医学系実習、3 学年次の地域包括ケア実習等に繋がっていくことを期待しています。

例年、学生のレポートを掲載し、報告させて頂いておりましたが、今回は、カリキュラムの詳細の説明とさせて頂きました。1 学年次の臨床実習では、「医学知識がないから教えにくい。」、「何もさせられない。」、「社会人としての態度がなっていない。」等の厳しいお言葉を学内外から頂くことも少なくないのですが、早期体験実習は、本学の教育理念「医学知識や技術の修得はもとより、医師を志す者として教養豊かな人間性を涵養すること」の第一歩となる重要な実習であると考えております。今後とも、学内外の先生方を始めとするスタッフの皆様のご協力・ご指導をお願い申し上げます。

医学部地域包括ケア実習体験記

医学部では、チーム医療の実際について理解することや様々な視点から患者ケアを実践すること、「地域社会への貢献」における地域包括ケアの実践に参加できることを目標に老人保健施設等において実習を行っています。

3日間（令和元年9月11日（水）～13日（金））の実習により、多くの学びを得た学生の体験記をご紹介します。

個々人の希望に沿った支援と地域包括システム活用の重要さ

実習施設：名東区地域包括ケアセンター（11日）

愛泉館（12日～13日）

3学年次生 山羽 瑠美

今回、私は名東区地域包括ケアセンターと、老人保健施設である愛泉館で実習を行わせて頂きました。この2施設での実習を通して、高齢者との生活はどのようなものなのか、地域包括ケアシステムがどのようなものなのか、という2点について学ぶことができました。

高齢者との生活について、できないことを代わりに全てやってしまうのではなく、自分でできるようにサポートすることの方が重要なのだと思いました。実習の中で利き手が病気により使えなくなってしまった方の裁縫をお手伝いする機会を頂きましたが、利き手が使えなくても誰かが少し手伝えれば綺麗な裁縫ができるのだと驚きました。そして、その方はきっと利き手が使えた時ほど上手には作れないのだろうけれど、少しずつ形を自分で作れることに嬉しく感じているようでした。しかし「何ができて、何に困っているのか」というのは個人によって大きく異なり、それを把握するのも難しいと感じました。入所されている方とお話しをする中で、何かに困っているのには気づけても、何に困っているのか、何をすることができると聞き出すのに苦労した場面がありました。何かをして欲しいと精一杯伝えようとしてくれるのに、私はなかなか聞き取ることができず少しもどかしかったです。しかし、時間をかけてお話を聞いて、私が持ってきたものが正しかったときは嬉しく思いました。代わりに全てやってしまうことの方が簡単な場合が多いとは思いますが、今回の体験から、高齢者自身の生きがいや希望を尊重するためには時間がかかっても、自分でできることは自分で行えるように支えていくべきだと考えました。

地域包括ケアシステムについて、行政は地域全体の

様々なことに関わっていることに感心しました。現在の日本に進んでいる少子化、高齢化、核家族化に対応するためには地域ぐるみの活動を広げていくことが必要です。しかし、隣に住んでいる人も分からないという人がいる時代でもあるので、難しいこともあると思います。

今回の実習ではふれあい・いきいきサロンという場所へ同行させて頂きましたが、普段から行政の方は地域の様々な場所へ訪れているそうです。これには地域での困りごとを行政側が把握する目的もあるのだと思いますが、行政の方が直接足を運ぶことで地域の方にとっては行政が身近に感じられ、相談もしやすくなるのだと考えました。せっかくボランティア団体やサポートできる制度があっても、利用者がそれを活用できなければ問題は解決できません。実際私は、讚美歌の先生や盲導犬とその飼主さん、裁縫を企画する方など施設外の地域の方が頻繁に老人保健施設へ訪れていることを知りませんでした。個人を地域にある制度やサービスへつなぐという行政の働きはとても重要だと思いました。

住み慣れた地域で人生を最期まで過ごしたい、このことは多くの方が希望していることだと思います。しかし、これを達成するためには人によって異なるサポートが必要です。そして、みんなが平等にそれぞれに合ったサポートを受けるためには、行政、医療職のみならず、地域で暮らす様々な人の協力が必須となります。今回の実習で地域包括ケアの一部に触れることができました。今後、私はいろんな患者さんに出会うこととなりますが、その際にはその患者さんだけでなく患者さんの周りである地域のことにも広く見ていけるようにしていきたいです。

看護学研究科セミナー開催

令和元年8月3日(土)午後2時から大学本館たちばなホールにおいて、大学院看護学研究科セミナー「日本のナース・プラクティショナー(仮称)の将来を考える」を開催しました。【写真】

第1部では、日本看護協会常任理事の井本寛子氏から「ナース・プラクティショナー(仮称)制度創設に向けた日本看護協会の考え方と取り組み」と題して、日本の高齢化と医療の高度化が進む中で、国際標準のナース・プラクティショナー(仮称)を目指した新たな制度創設の必要性についてご講演を頂きました。

第2部のシンポジウムでは、「日本のナース・プラクティショナー(仮称)の将来」と題して、当事者である方々から問題提起をして頂き、参加者の皆様とディスカッションしました。実践者の立場から、プライマリケア領域の診療看護師(NP)の中山法子氏、クリティカルケア領域の診療看護師(NP)の加藤美奈子氏には、より制度化を進めることによって、人々の医療と看護のニーズに対応できる現状があることを実践事例を踏まえてお話し頂きました。

また、日本NP学会理事長の福永ヒトミ氏には学会の

立場から、大分県立看護科学大学診療看護師(NP)養成課程教授・日本NP教育大学院協議会理事の小野美喜氏には教育機関の立場から、現在の診療看護師(NP)の成果の公表と新たな制度化に向けた課題を明確にする必要性について、お話し頂きました。ディスカッションでは、参加者の皆様と活発な意見交換を行うことができました。

新たな制度の構築を目指すために貴重な情報交換と議論ができたセミナーとなりました。



【高大連携事業】

愛知医科大学病院体験学習開催

令和元年8月8日(木)午前9時30分から11時30分まで、愛知県立長久手高等学校との高大連携事業「医療看護探究C」の授業の一環として、「愛知医科大学病院体験学習」を開催しました。今年度4月以降、医学部、大学病院、看護学部から派遣された講師の授業をもとに、医療・看護が大切にしていることの実際を学ぶことを目的として、「医療看護探究コース」の第2学年の生徒14名が参加しました。

当日は、大学病院井上里恵看護部長から「大学病院での医療と看護の特徴」について紹介を受けた後、中央棟の9A・9B(消化器内科、消化器外科)、10B(呼吸器内科、呼吸器外科)の各病棟に看護師ユニフォームを着用して、実際の看護場面を見学しました。高校生たちは、病棟の構造や看護師の活動などを見学しましたが、病室の設備や感染予防対策などを実際に見ることで、患者の安全・安楽の重要性を学びました。また、持続点滴を受けながら笑顔で退院される患者を労う看護師の関わりをみて、患者の立場になって考えることの大切さを実感しました。

約1時間の見学を終えた後、看護学部棟講義室に場所を移して、高校生たちが実際の医療現場を見学して感じ



ユニフォームを着用し振り返りをする高校生

たことを共有し、学習の振り返りを行いました。

高校生からは「看護師さんが患者さん一人ひとりを大切にしていた。」「病棟が明るく清潔感があった。」「医療を行う上でチームワークを大切にしていた。」などの感想があり、学習目的である「医療・看護が大切にしていること」の理解を深めることができました。

本学では、愛知県立長久手高等学校との高大連携事業として、今後も良き医療人を育成するための様々な企画を開催する予定です。

更なる相互交流の発展を目指して
アメリカ南イリノイ大学医学部
(Southern Illinois University School of Medicine SIU)
教員来学

本学医学部では、平成17年3月から南イリノイ大学(SIU)との学術国際交流を行っており、教員の招へいや相互に学生の派遣・受け入れを行っています。

例年本学からは、5学年次生を対象とした臨床実習に参加するコースと、3・4学年次生を対象としたSIU 2年生カリキュラムを受講するコースの二つのコースへ学生を派遣しています。令和元年10月15日(火)、16日(水)の2日間にわたり、この学生の受入れに多大なご協力を頂いているSIUのJohn P. Sutyak先生(外科学講座・准教授)及びHeeyoung Han先生(医学教育講座・講師)が来学され、本学の視察や学生・教員との交流を行いました。

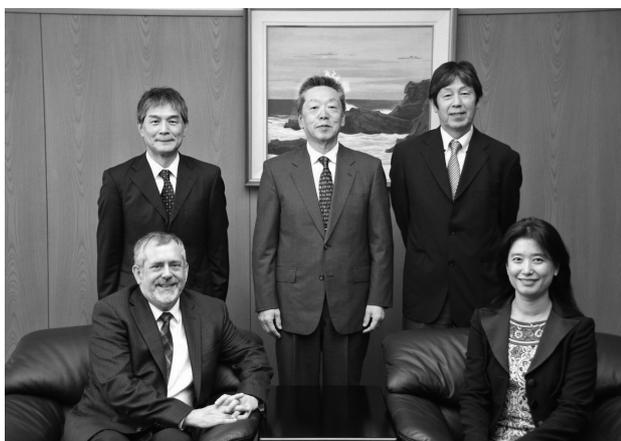
今回の来学では、祖父江 元 理事長、佐藤啓二学長、若槻明彦医学部長への表敬訪問【写真】や来学された先生方による「Teaching in Medicine: ATLS and the Laws of the Harvest」及び「Medical Students' Progress in Detecting and Describing Visual and Auditory Clinical Findings」について講演が行われまし



た。SIUでは、先駆的な教育カリキュラムの開発と充実した医学教育システムの整備を重点的に行っており、この講演では、これらに関する知識や理解を深めるよい機会となりました。

また、SIUへ派遣予定である医学部5学年次生に対するケースプレゼンテーションの指導だけでなく、4学年次生に対しても、SIUで行われているPBL(問題立脚型学習)や医療英語の指導をして頂きました。指導後は、派遣学生との懇談会も行われ、学生にとっては、指導を受けた際の緊張感から解放され、積極的に先生方とコミュニケーションを図り、親睦を深めることができました。また、派遣に向けての新たな学習課題を形成できるよい機会となり、モチベーション向上へと繋がったようです。

このように、例年のSIU教員の来学は、両大学の相互交流の更なる発展に大いに役立っています。医学部では今後も引き続き学術国際交流協定校等の開拓に努め、更に多くの学生に海外留学へのチャンスを与えるとともに、海外大学の学生の受入れを通して、学生が国際的な視野を広げる一助になるよう一層努力していきます。



第23回へき地離島救急医療学会において 医学部学生が発表

令和元年9月28日（土）北海道札幌市にて第23回へき地離島救急医療学会が開催されました。演題募集以前より今期学会長である札幌東徳州会病院の滝健治先生から本学医学部医学教育センターの青木瑠里講師に連絡があり、「昨年引き続き、地域枠学生を対象にしたセッションを行うので是非演題を依頼したい」との要望を頂きました。第21回・第22回の同学会で発表経験がある、医学部3学年次生の梶浦知尚さんから次回学会発表の強い希望があったため、今年度においても演題登録することとなり、青木講師のバックアップを得て無事発表することができました。

今回の内容は「地域枠学生として様々な地域で病院・医院実習を行い感じたこと」と題し、コミュニケーション能力の種類やその大切さ、取得方法などを学んだ内容を報告しました。更にALS患者さんの声なき想いを理解するために必要な事は何かについても学び、共感的理解や客観的理解について理解し、この理解を深めていくためにも幅広い医学知識が必要不可欠であるということも学んだことを報告しました。梶浦さんは試験に追われる3学年次で有りながら、前日まで発表原稿を調整し、予演会もこなし努力を続けて一人で学会の舞台に立つという勇気も持って挑んでくれました。

梶浦さんから「自分の実習の振り返りを自分一人では思い出すだけでなく、医師である青木先生にもフィードバックして頂けたことが非常に良かったと思います。足助病院から訪問看護実習に参加した際の、48歳のALS末期患者との出会いについて自分が話をした際、『命』や、『意思』、『医師だからこそできること』について大変深く理解することができました。また、今回の学会発表は、自分にとって3回目のへき地離島救急医療学会での発表であり、様々な方との面識を持つことができていることを実感しました。1,2回目の学会の際は、他地域から来た先生と話す機会が青木先生の紹介なしでは全くなかったことに対し、今回の学会では自ら積極的に知り合いの先生に話しかけたり、自分が知らない先生に話しかけて頂いたりすることができました。その中で、札幌東徳



学会会場前で
記念撮影

州会病院の院長である瀧先生とお話をして、来年の3月に実習をお願いすることができました。そして、今回は指導医不在の中、一人で学会に参加したことで度胸がついたと実感しています。これまでであれば、会場の先生から質問を受けた際、自分ではなく共同演者に答えて頂く場面が多かったのですが、今回は一人で堂々と返答ができ、とても良かったと感じました。」との感想がありました。

発表後、函館新都市病院の浅井先生や司会をして頂いた島根県立中央病院の松原先生からお褒めの言葉を頂いたと報告を受けました。また、会場の先生から「感動しました。」と声をかけられたようです。彼はまた来年への発表意欲も示しているため、青木講師は、そんなやる気のある彼のバックアップを継続していきたいと考えているとのこと。皆さまからの応援もよろしくお願いたします。

病院機能評価キックオフ大会の開催

病院機能評価キックオフ大会が、9月9日（月）に大学本館たちばなホールにおいて開催されました。

令和2年度に本院が受審を予定している、病院機能評価における準備のスタートとして開催されたもので、藤原祥裕病院長からのキックオフ宣言後、準備活動支援業者の講師の方から、審査項目の概要、審査当日の流れ及び重要ポイント等について講演して頂きました。

本院が病院機能評価を受審するのは今回で4回目となり、新たに新設された一般病院3というカテゴリで審査が行われます。一般病院3とは、本院が前回受審した一般病院2よりも、かなり高いレベルの審査水準となっており、職員が一丸となって業務改善に取り組み、認定が受けられるよう一層努力いたします。

日本診療放射線技師会「医療被ばく低減施設認定」を取得

中央放射線部では、公益社団法人日本診療放射線技師会が実施している「医療被ばく低減施設認定」を令和元年8月1日付けで取得しました。現在この「医療被ばく低減施設認定」は、全国で102施設が取得しています（令和元年9月1日現在）。愛知県内では13施設が取得していますが、中日本地域の大学病院では初めてです。

現在の医療に放射線は欠かせないものですが、医療被ばくを適正に管理することがとても重要です。認定の過程では、自己評価を基に書類審査が行われた後、現地訪問調査を受けました。患者さんの被ばく線量をしっかりと把握記録し、適切な被ばく低減に取り組んでいるか、検査等のマニュアルが整備されているか、職員の研修がきちんと行われているか、患者への説明が適切に行われているか、装置の保守管理が適切に行われているかなど、

多岐にわたる内容を第三者機関がしっかりと評価するものです。

今回の認定取得を礎に、診療放射線技師の責務として、X線画像の質を担保した上で医療被ばくの低減を推進し、これからも患者さんに安全かつ安心できる高度な医療を提供していきたいと考えています。



医療被ばく低減施設認定証

医療安全講演会開催

～RRSの早期導入の必要性と現状報告～

令和元年8月30日（金）大学本館たちばなホールにおいて、全病院職員を対象とした医療安全講演会が開催されました。

今回の講演会では、聖マリアンナ医科大学救急医学講座の藤田茂樹教授の「院内早期治療介入システム（RRS）が医療安全文化を変える」と、本院周術期集中治療部の藤田義人教授（特任）の「愛知医科大学病院の現状」の2題の講演が行われました。

藤谷教授からは、RRSの定義から導入するまでの軌跡、導入後の運用や改善点等ご自身の実践を基に、医療安全文化を変えた実状を分かりやすく講演頂き、本院での

RRS導入の必要性を改めて実感させられるものでした。

藤田教授（特任）からは、医療従事者には、患者の“異常なサイン”を気付く、観察力、判断力が重要であり、気付きのレベルを上げることが医療の安全性を高めることに繋がること、また、RRS等のチーム医療によって病院全体で協力体制をとることの必要性について、院内発生緊急対応の実績調査の結果に基づいて講演されました。

本講演を受け、本院でもRRS導入に向け準備が進められており、職員の理解と協力が求められています。

高校生一日看護体験実施

令和元年8月7日（水）愛知県看護協会ナースセンターからの依頼を受け、高校生一日看護体験研修を行いました。当日は、長久手高等学校、栄徳高等学校、豊田北高等学校から26名の高校3年生が参加しました。オリエンテーションを受けた後、井上里恵看護部長から一日看護師辞令を交付、病棟で看護体験を行いました。

病棟では、清拭、食事介助、点滴など看護師の実際の仕事を見学したり、患者さんと話をすることができました。午後から全員で記念撮影後、坂本真理子看護学部長から看護学部の紹介があり研修終了となりました。

研修後のアンケートでは、「ユニフォームが着られてうれしかった。」「体験を通して看護師になりたい気持ちが強くなった。」「愛知医科大学病院で働きたいと思った。」などの意見が聞かれ、受け入れた私たちも大変うれしい気持ちになりました。このような体験を通して、



参加者全員での記念撮影

看護師を目指す高校生が一人でも多く育まれることを願っています。

ボランティアによる折り紙講習会

8月16日（金）に中央棟3階パブリックスペースにおいて、ボランティアによる「ミニ講習会（折り紙製作）」が開催されました。

本院のボランティアさんが講師となり、夏をテーマに「金魚」を作り、縁日のように金魚釣りをして楽しみま

した。また、定番の「傘」など、様々な作品を皆さんで作りました。

開催を心待ちにしてくださっていた方など、たくさんの方々にご参加頂き、参加された患者さんから「八角箱」の作り方を教わるなど、楽しいひと時となりました。

ボランティアによるコンサートの開催

8月22日（木）に中央棟1階オアシスホールにおいて、ボランティアによる「歌とギターコンサート」が開催されました。コンサートは、カーペンターズの「Close to you」、ナットキングコールの「L-O-V-E」などの洋楽から、朝ドラ主題歌の「優しいあの子」、「愛燦燦」、「見上げてごらん夜の星を」など様々なジャンルの曲が演奏され、優しく伸びやかな歌声と心地よいギターの音色を披露して頂きました。

9月13日（金）には、中央棟1階オアシスホールにおいて「大正琴のコンサート」が開催されました。曲目は、「真っ赤な太陽」、「わたしの城下町」、「よこはまたそがれ」、「川の流れのように」などの懐かしい曲を中心に全7曲が演奏され、客席からのアンコールには、「北の国から」を披露して頂きました。大正琴の美しい音色が会場に心地よく響き、楽しいひと時となりました。

愛すまいる始動

令和元年9月24日（火）、新病院開院以来、患者さんのための図書室として親しまれてきた「健康情報室アイブラリー」が「愛すまいる」としてリニューアルしました。【写真】当日は、オープニングセレモニーとして病院長、看護部長、愛知医大サービス株式会社の山岸越夫社長等によるテープカットが行われました。「愛すまいる」は、病院とアルフレッサメディカルサービス、ヤガミホームヘルスケアセンターの三者が協働して「愛」と「笑顔」でお届けする新しい病院サービスです。人々の暮らしと「すまい」を支える、人々が集う「いる」のメッセージを込めています。



テープカットセレモニー

「愛すまいる」では、iPadを自由に活用して医療情報を検索することができ、疾病や治療に関する相談には看護師が対応します。介護用品や住宅改装の相談、医療材料の販売など患者さんのセルフケア、療養生活、介護等に必要な情報や物品を揃えています。診察等の待ち時間を利用してお立ち寄りください。

また、地域の皆さまにも、お役に立つセミナー等を企画しておりますので、是非ご利用ください。



【施設紹介】 愛知医大サービス株式会社

学校法人愛知医科大学の関連会社である愛知医大サービス株式会社は、一般財団法人愛知医科大学愛恵会から一部事業を継承し、新たに平成25年12月3日に設立されました。学校法人愛知医科大学が100%出資する株式会社として、同法人からの受託事業を中心に運営されています。このほか、患者さん、教職員、学生向けのサービス事業も行われています。

スタッフからは、「少しでも便利に気持ちよく過ごして頂けるように、また有益な情報の発信や日々の運営を活性化できるように、スタッフ一同頑張っております。」と意気込が語られました。

<事業内容>

- ・店舗事業（学内レストラン、喫茶、フードコート、コンビニ、医療売店、理美容室、書店等）
- ・インフォメーション業務、交流ラウンジ管理
- ・損害保険代理業



愛知医大サービス株式会社スタッフのみなさん

- ・各種斡旋事業（アパート等）
 - ・大学オリジナルグッズ企画及び販売
- <http://aichi-idai-service.com/>

令和元年度目標管理評価者研修を実施

令和元年8月28日（水）医心館1階多目的ホール1・2において目標管理評価者研修を実施し、午前・午後の部を合わせて52名が参加しました。【写真】

大学運営の高度化に対応できる人材の育成を目的としている目標管理制度において、評価者には目標設定から評価までのPDCAサイクルを通し、職員一人ひとりのモチベーションを高め業務成果を上げていくという重要な役割が期待されています。今回の研修では、評価の意義と重要性から、評価の手順、評価面談の流れについて学習しました。研修中はグループワークやペアワークを多く行い、評価者が陥りやすい行動や、面談での接し方などについて理解を深めました。

受講者アンケートでは、約95%が「理解できた」と回

答し、「自分の足りないことは自覚して、必ず改善したい。」「部下の力を活かせるように、学んだ内容を行っていきたいと思います。」などのコメントがありました。



ハラスメント防止のための研修会を開催

ハラスメントの防止に係る啓蒙活動の一環として、令和元年9月20日（金）午後5時30分から大学本館201講義室において、筑波大学教授の松崎一葉氏を講師にお迎えし、ハラスメント防止に関する教職員研修会が開催され、87名の参加がありました。【写真】

講演では、産業医として数々のパワハラ案件を取り扱ってきた松崎先生から、実際にあったパワハラ事例が紹介され、続いて、部下をつぶす“クラッシャー上司”が生まれる背景や、“クラッシャー上司”に対していかにして再教育を施すべきか、などといった具体的対策についての説明がありました。研修会後のアンケートでは、回答者の98%が研修会に対して「大変満足」、「満足」と回答しており、「今回の研修会はこの4～5年間で行われたハラスメント講演会の中で最も興味深い内容でした。」



「今回の研修は職員全員が聞くべきものと思います。」といった意見があることから、次回は全職員がこのハラスメント研修会を聴講できるよう、検討していきたいと思っています。

令和元年度事務職員向け学内SD研修を実施

令和元年8月から10月にかけて、事務職員が各部署の業務内容と最新情報を理解することで知識向上と業務の効率化を図ることを目的として、学内研修を開催しました。【写真】

医療費請求業務や保険制度の仕組み、昨今社会で声高に叫ばれる「働き方改革」、また、事務職員として欠かすことのできない法制執務の基礎知識などについてそれぞれの担当者から説明があり、普段の業務の中ではなかなか知ることのできない深い知識や情報を事務職員同士が共有することができました。

受講者からは、「病院の収入の基となる部分の話が聞けて大変参考になりました。」「働き方改革は言葉ばかりが先行して労働者の理解がついていけないように思うので、今回詳しい内容が聞けて大変勉強になりました。」「法制執務の基礎知識不足を実感していたことから、基礎的な部分を知ることができて非常に良かった。」といった感想がありました。今後も様々な部署に講師を依頼し、本研修を事務職員の知識向上と情報共有の機会とする予定です。

＜事務職員向け学内研修＞

- 開催日：令和元年8月21日（水）
テーマ：医療制度と医事課の役割
講師：医事管理部医事課 西山 駿介 主任
- 開催日：令和元年9月11日（水）
テーマ：労務管理・働き方改革
講師：人事・厚生室 角 育男 課長
廣江 真也 主事
- 開催日：令和元年10月16日（水）
テーマ：法制執務の基礎
講師：総務・秘書室 宮島 朋之 主事



新規採用事務職員半年フォロー研修実施

事務部門の新規採用事務職員を対象に、配属後半年を一つの区切りとしたフォロー研修を令和元年9月18日（水）に立石プラザにて実施しました。【写真】

初めに、4月入職後から今までの出来事や自分の気持ちの変化の振り返りを行い、半年間に自分がどのように成長したかを感じてもらいました。次に「独り立ちへの不安解消」、「人間関係のストレス解消」をテーマにした講義を聞くことで、今抱えている不安をどのように解消し、ストレスに対してどのような対策を行っていくべきか考えました。最後に、これからの半年間の目標設定を行い、来年度には先輩職員となる心構えを皆さんに発表してもらいました。

受講者からは、「入職したての頃の自分の気持ちを振り返り、自分の成長できた点、変わっていない点などを考えることができた。」「まずは独り立ちを果たし、残

りの半年で後輩の手本となる2年目になれるよう頑張りたい。」といった感想がありました。

本学では、大学の将来を担う人財を育成するためのSDに今後も継続的に取り組んでいく予定です。



看護部 川崎香奈子看護師長 愛知県看護功労者表彰受賞

看護部の川崎香奈子看護師長【写真】が、愛知県看護功労者表彰を受賞されました。

これは、看護職員として長年業務に従事し、顕著な功績のあった者に授与される賞であり、令和元年5月14日（火）ウインクあいちにおいて開催された2019年度愛知県看護大会の席上で、表書式が行われました。

表彰を受けた川崎師長から「このような栄誉ある賞を頂き、大変光栄に思っています。これも諸先輩を始め、同僚や後輩の皆様のご指導とご協力、温かい励ましがあったのものと感謝しております。今後も看護部の理念を忘れず、患者さんの意思決定を支援し、患者さん中心の看護の提供に努めていきたいと思っております。」との感想がありました。



基礎科学部門 宮本 淳准教授他 第1回初年次教育学会教育実践賞「優秀賞」受賞

心理学の宮本淳准教授が報告した取組みが、令和元年9月7日（土）創価大学で開催された第12回初年次教育学会において、第1回初年次教育学会教育実践賞優秀賞を受賞しました。【写真】

これは、基礎科学部門の宮本淳准教授、仙石昌也准教授、山森孝彦教授、久留友紀子准教授、橋本貴宏准教授によるクラウドを利用した初年次学生レポート作成過程の分析とその教育効果についての取組みが、アクティブラーニングやICTの効果的活用による初年次教育の実践例として高く評価され、優秀賞として選定されました。

受賞された宮本准教授からは、「アカデミックリテラシーは基礎科学全教員で熱心に取り組んでいる科目で、

『教員同士の綿密な連携と周到なプログラム設計が評価された』とあり、大変嬉しく感じます。今後も多面的視点から初年次教育の充実に積極的に努めていきたいと思っております。」との感想がありました。

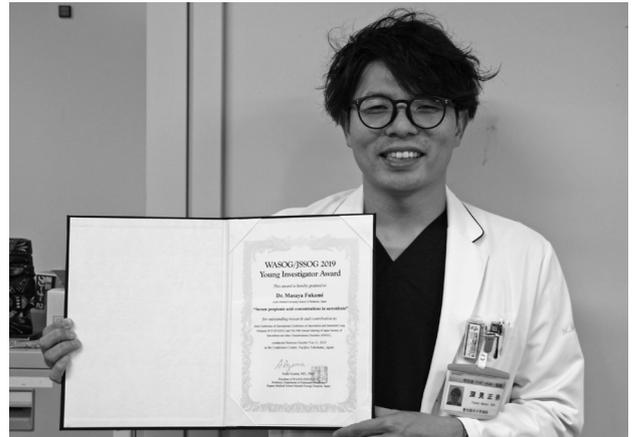


呼吸器・アレルギー内科 深見 正弥助教（専修医） Young Investigator's Award受賞

呼吸器・アレルギー内科の深見正弥助教（専修医）【写真】が、令和元年10月9日（水）から11日（金）までの3日間にパシフィコ横浜で開催された世界サルコイドーシス／国際肺疾患学術会議2019（WASOG2019）及び第39回日本サルコイドーシス／肉芽腫性疾患学会総会（JSSOG）において、Young Investigator's Awardを受賞しました。

これは、一般演題108題の中から1名のみが選定される若手研究者賞であり、今回「Serum propionic acid concentrations in sarcoidosis（サルコイドーシスにおける血清プロピオン酸濃度）」についての取組みが高く評価されました。

受賞された深見助教（専修医）からは、「国際学会で初めての英語発表であり、当初は大きな不安を感じました。しかし、皆さま方のご協力及びご指導により無事発



表を終えることができました。その結果、名誉ある賞を頂き大変光栄に存じます。今後もなお一層精進していく所存です。」との感想がありました。

学 術 振 興

学 位 授 与

◆大学院医学研究科



眞野 まみこ

学位授与番号 甲第544号

学位授与年月日 令和元年5月23日

論文題目：「Impact of Gender and Age on

Rapid Eye Movement-Related Obstructive Sleep Apnea: A Clinical Study of 3234 Japanese OSA Patients (REM関連閉塞性睡眠時無呼吸における性と年齢の影響: 3234人の日本人閉塞性睡眠時無呼吸患者の臨床研究)」



坂梨 大輔

学位授与番号 甲第545号

学位授与年月日 令和元年9月19日

論文題目：「A novel disk-based detection

method with superior sensitivity for β -lactamase production in third-generation cephalosporin-resistant Enterobacteriaceae (第3世代セファロスポリン耐性腸内細菌科細菌の産生する β -ラクタマーゼ検出のための感度に優れた新規ディスク法)」



山永 成美

学位授与番号 乙第397号

学位授与年月日 令和元年7月11日

論文題目：「Inferior long-term graft

survival after end-to-side reconstruction for two renal arteries in living donor renal transplantation (生体腎移植時の2本の腎動脈に対する、端側吻合による血管形成は、長期生着が劣る)」

◆大学院看護学研究科



荒木 清吾

学位授与番号 第120号

学位授与年月日 令和元年9月27日

論文題目：「精神看護学実習で実習指導者

が捉えた受け持ち患者の反応とケアへの活用の現状」

研究助成等採択者

○公益財団法人テルモ生命科学振興財団

国際交流助成金

●氏名 菊地正悟（公衆衛生学講座・教授）

学会名称 第25回日本ヘリコバクター学会学術集会

助成金額 500,000円

○公益財団法人武田科学振興財団

2019年度医学系研究助成金

●氏名 山村彩（生理学講座・講師）

研究題目 肺高血圧症に関与するサイトカイン受容体のDNAマイクロアレイ解析

助成金額 2,000,000円

○公益財団法人大幸財団

2019年度自然科学系学術研究助成

●氏名 高村祥子（感染・免疫学講座・教授）

研究題目 慢性炎症における脂質会合タンパクの機能

助成金額 4,000,000円

○公益財団法人SGH財団

第1回SGHがん看護研究助成

●氏名 中村正子（看護学部・講師）

研究題目 難治性乳がん患者に関わる看護師への継続的な緩和ケア教育推進モデルの構築

助成金額 500,000円

○公益財団法人日東学術振興財団研究助成

●氏名 姫野龍仁（内科学講座（糖尿病内科）・講師）

研究題目 糖尿病性神経障害におけるNotch-インスリンシグナルの病態形成への関与の解明

助成金額 1,000,000円

○公益財団法人日東学術振興財団研究助成

●氏名 兵頭寿典（生化学講座・講師）

研究題目 新たな細胞分裂制御因子の同定とその機能解析、および同定した因子ががん治療への標的分子となり得るかの検討

助成金額 1,000,000円

○公益財団法人日東学術振興財団海外派遣助成

●氏名 池上啓介（生理学講座・助教）

学会名称 アメリカ時間生物学会（SRBR2020）

助成金額 300,000円

○公益財団法人金原一郎記念医学医療振興財団

第34回基礎医学医療研究助成金

●氏名 山村彩（生理学講座・講師）

研究題目 性ホルモン感受性TRPM3チャネルを創薬標的とした新規肺高血圧症治療薬の開発

助成金額 600,000円

本学講座等の主催による学会等

【学会名】

- ・第3回中部関西診療看護師（NP）研究会学術集会
- ・第19回日本感染看護学会学術集会
- ・第29回愛知眼科フォーラム
- ・第9回国際腹膜透析学会アジア・太平洋大会
- ・第28回消化器疾患病態治療研究会
- ・日本麻酔科学会東海北陸支部第17回学術集会
- ・第28回日本組織適合性学会大会
- ・第11回プロテオグリガン国際会議

【開催日】

令和元年8月3日(土)
令和元年8月23日(金)・8月24日(土)
令和元年9月1日(日)
令和元年9月5日(木)～9月7日(土)
令和元年9月6日(金)・9月7日(土)
令和元年9月7日(土)
令和元年9月21日(土)～9月23日(祝・月)
令和元年9月29日(日)～10月3日(木)

【会長等】

黒澤 昌洋
佐藤 ゆか
瓶井 資弘
伊藤 恭彦
春日井邦夫
藤原 祥裕
小林 孝彰
渡辺 秀人

第3回中部関西診療看護師(NP)研究会学術集会

臨床実践看護学・講師 黒澤 昌洋

日本NP学会地方会・第3回中部関西診療看護師（NP）研究会学術集会を、令和元年8月3日（土）に本学看護学部棟において開催致しました。

本学術集会のメインテーマは、「拡張する臨床実践看護の創造」とし、教育講演では、地域総合診療医学寄附講座の宮田靖志教授（特任）に「臨床で役立つ一発診断」としてご講演を頂きました。ハンズオン・シミュレーションでは、Point of Care Ultrasonographyなど7つの企画を実施し、ディスカッションでは、診療看護師（NP）

と特定行為研修修了者との協働についてと、中部関西地区にある3大学院生による学生企画を実施しました。拡張する臨床実践看護を創造するための知識と技術を高め、相互の交流により新しい価値を発見することができた学術集会となりました。

末筆になりましたが、本会の開催にあたり皆様方の多大なるご支援、ご協力を賜りましたことを心より御礼申し上げます。

第19回日本感染看護学会学術集会

感染看護学・教授 佐藤 ゆか

第19回日本感染看護学会学術集会は、令和元年8月23日（金）・24日（土）に本学本館たちばなホールにおいて、会長：佐藤ゆか、事務局長：本学看護学長崎由紀子准教授、企画委員：千葉大学看護学研究科岡田忍教授、名古屋市立大学看護学研究科矢野久子教授、本学看護学部沢田淳子助教、同板津良助教として開催されました。

今回の学術集会では、「現象に根差した感染看護とこれからの地域連携」をテーマとし、看護職としての確かな眼で現象を見つめ直し、感染症に関わる問題に対応し

ていくためのこれからの地域連携を考えることを目的に、複数の教育講演、特別講演、シンポジウムを企画しました。日本感染看護学会学術集会の愛知県開催は始めてではありましたが、例年を上回る約200名の参加者をお迎えし、各セッションでは活発なディスカッションが行われ、盛況のうちに会を終えることができました。

本学会の開催にあたり、本学関係者の皆様や愛知県看護協会を始め、多くの皆様方から多大なご支援・ご協力を賜りましたことに心より御礼申し上げます。

第29回愛知眼科フォーラム

眼科学講座・教授 瓶井 資弘

愛知眼科フォーラムは、本学眼科学講座が主催し、一般眼科医、視能訓練士に公開している眼科全般の学会です。毎年1回開催しており、本年度は第29回大会を、令和元年9月1日（日）興和株式会社本社ビル（名古屋市中区栄）において開催しました。【写真】

当日は計93名が参加され、特別講演は、若林卓先生（大阪大学大学院医学系研究科眼科学）、三宅養三先生（神戸愛センター・New Vision理事長）の2名をお招きして、それぞれ「視機能改善を目指した網膜硝子体疾患の外科的治療戦略」と「昭和と平成の私の眼科」と題した講演が行われました。また、本学眼科学講座と関連病院から18題の一般演題の発表があり、いずれも高度な眼科医療、高い水準の研究を示すもので、活発な質疑応答が行



われ盛会のうちに終了することができました。

最後に、本学会を開催するに際しまして、一般財団法人愛知医科大学愛恵会よりご支援を頂きましたこと、心より御礼申し上げます。

第9回国際腹膜透析学会アジア・太平洋大会

内科学講座（腎臓・リウマチ膠原病内科）・教授 伊藤 恭彦

第9回国際腹膜透析学会アジア・太平洋大会（APCM-ISPD2019）は、本学内科学講座（腎臓・リウマチ膠原病内科）の伊藤恭彦が大会長を務め、2019年9月5日から7日までの3日間、名古屋国際会議場で開催されました。【写真】 総参加者は1,193名に上り、うち469名の方が海外18か国より参加されました。指定97演題に加えて、一般449演題の発表があり、大変活発な会となりました。祖父江 元 理事長、佐藤啓二学長両先生にもご参加・ご挨拶を頂き、会期中活発かつ有意義な意見交換が行われ、盛会裡に終えることができました。

今回のテーマを「腹膜透析の最新の進歩と教育」と定め、日々世界に発信されている臨床研究、基礎研究の新しい知見を効率よく知って頂くとともに、教育セッションを多く採用しました。講演だけではなく症例カンファレンスを行い、アンサーパッドを用いたQ&A方式の参加型の試みは大変好評でした。社会の高齢化とともに、



透析患者の高齢化が進む中、Assisted PDを含めた在宅透析の意義・システム作りの議論が海外の先生方と共に進み、充実した会となりました。これらの議論が、本邦のみならず世界の腎不全診療の助けとなればと考えております。

末筆になりましたが、ご支援を頂きました愛恵会を始め、多く先生方にこの場をお借りして厚く御礼を申し上げます。

第28回消化器疾患病態治療研究会

内科学講座（消化管内科）・教授 春日井 邦夫

令和元年9月6日（金）・7日（土）の2日間、ウイंकあいちにて第28回消化器疾患病態治療研究会を開催させて頂きました。【写真】本研究会は、名称が示すように消化器疾患全ての領域の疫学・病態・診断及び治療に関する研究成果について、内科・外科を問わず横断的に議論を行うユニークな研究会です。主題演題、スポンサーシンポジウム、一般演題に加え、研修医アワード、ランチョンセミナー、イブニングセミナーから構成され、全国から多くの先生方にご参加頂き、活発な討論が行われました。特筆すべきことは、研修医アワードにおいて当診療科の庄田怜加先生が最優秀賞を、今津充季先生が優秀賞を受賞しました。当診療科の若手医師の活躍が認められ、今後の更なる研究活動の励みとなりました。

末筆となりましたが、本学会の開催に当たり多大なる



ご支援とご協力を賜りました、一般財団法人愛知医科大学愛恵会、消化管内科同門会春水会並びに関係者の皆様に心より御礼申し上げます。

日本麻酔科学会東海北陸支部第17回学術集会

麻酔科学講座・教授 藤原 祥裕

令和元年9月7日（土）、名古屋市の名古屋コンベンションホールにて開催された日本麻酔科学会東海北陸支部第17回学術集会の会長を務めさせて頂きました。麻酔科領域では初めて使用される会場で、若干の不安もありましたが、交通の便も良く会場も綺麗で参加者から好評を得ていました。日本麻酔科学会は、麻酔・周術期医療に関して国内で最も権威ある学会ですが、その東海・北陸支部の学術集会は、若手麻酔科医に発表の機会を与え

ると共に、専門医講習や教育講演、リフレッシュコースを中心とした教育に主眼を置いた学会です。若手麻酔科医による口演、ポスター発表など多数応募があり、熱心な討論が行われました。また、敗血症治療、無痛分娩に関する専門医領域講習、医療安全、感染に関する専門医共通講習も行われ、活発に質疑応答が行われました。

末筆になりますが、本会の開催にあたりご支援賜りました皆さまに、この場を借りて厚く御礼申し上げます。

第28回日本組織適合性学会大会

外科学講座（腎移植外科）・教授 小林 孝彰

日本組織適合性学会は、前身の研究会での38回を合わせると今回で66回を数える歴史ある大会です。本学会は、HLAに関する基礎研究（疾患感受性、免疫遺伝学）、検査医学（タイピング、抗体検査）、臨床医学（造血幹細胞、臓器移植、がん免疫）など幅広い分野に関係しております。様々な分野で活躍する会員の多様性、個性を最大限に引き出し、他の領域と連携することで新しい成果を創出し、会員の皆さんが学会の将来を一緒に考えることができるように、本年度は『多様性と個性、連携と創出：組織適合性学会の役割と未来』をテーマとして、大会長に外科学講座（腎移植外科）の小林孝彰、副大会長に内科学講座（血液内科）の高見昭良教授として、令和元年9月21日（土）から23日（祝・月）までウインクあいちで開催しました。【写真】

特別講演では、HLAエピトープに関する最新の研究内容をFrans H. J. Claas先生（ライデン大学、オランダ）に、T cell エピトープについてはEric Spierings 先生（ユトレヒト大学、オランダ）に、またエピジェネティクスについては、仲野徹先生（大阪大学）にご講演頂きました。新しい試みとして、検査担当者と臨床医によるQCWS（Quality Control WorkShop）の討論、イマキクを使った会場参加型のキャリア支援キックオフ・パネ



ルディスカッション、動物MHCシンポジウム、造血幹細胞・臓器移植の合同シンポジウムが行われました。ポスター発表時にはワインが振る舞われ、大会を通して参加者全員で熱く議論し、親交を深め、最新かつ有用な情報交換が行われました。本大会の最大のライバルである3連休にもかかわらず、400名を超える参加者をお迎えし、実りある大会となりました。

また、大会中には本学にて市民公開講座「病気がみえる！組織適合性抗原HLAって何？HLAをどのように利用しているの？」を開催致しました。

本大会の開催にあたり、多大なるご支援とご協力を頂きました関係者の皆様に心より御礼申し上げます。

第11回プロテオグリガン国際会議

分子医科学研究所・教授 渡辺 秀人

令和元年9月29日（日）から10月3日（木）の日程で石川県金沢市の石川県立音楽堂にて第11回プロテオグリガン国際会議を開催しました。【写真】本会議は西暦奇数年に各国持ち回りで行われ、第1回が日本（木全弘治名誉教授主催）、その後はイギリス、イタリア、スウェーデン、ブラジル、フランス、オーストラリア、ドイツ、韓国、イタリアと続いて今回20年ぶりに日本で開催することとなりました。

参加者は計20カ国からの168名でした。そのうち69名が海外からの参加で、極めて国際色豊かな会議となりました。正直なところ、これほど沢山の外国人研究者に参加して頂けるとは思いませんでした。国内外を問わず若手研究者の発表内容は画期的で質の高いものが多く、本研究分野の発展を確信した次第です。



主催者としてつくづく感じたのは、国内外の組織委員の方々を始め、皆さまが様々な面で積極的に協力して下さいましたことです。本国際会議の開催に当たり、多大なご支援・ご協力を賜りました関係各位に心より御礼申し上げます。

～大学・病院を支える笑顔豊かなスタッフ陣～

「Smile ～スマイル～」では、大学・病院で活躍する職員の笑顔にスポットライトを当てて、各部署における活動内容や取組みなどについて紹介いたします。

中央臨床検査部

中央臨床検査部（検査部）は、本院中央診療部門に属し、医師2名と臨床検査技師36名、医療技術補助員4名（内3人工分は業務委託）により診断・治療に重要な臨床検査（検体検査、生理機能検査）を担っている部門です。具体的に行っている検体検査は、尿・糞便等一般検査（尿定性、尿沈渣、便潜血等）、血液学的検査（CBC、血液像、血栓止血検査等）、生化学的検査（生化学、TDM等）及び免疫学的検査（感染症抗原抗体、腫瘍マーカー、各種ホルモン等）です。これらの検査を実施する検体検査室では、ほぼ全ての機器を複数台設置し、トラブル時でも「検査を止めない」をモットーとして迅速かつ精度の高い結果報告に励んでいます。

生理機能検査センターは、心電図検査から呼吸機能検査（肺活量、換気量等）、超音波検査（心臓、腹部、血管等）及び神経検査（脳波、神経電動速度、術中神経モニタリング等）まで幅広く対応し、「断らない検査」をモットーとして全体検査枠と当日予約枠の更なる充実を目指して日々研鑽を積んでいます。

検査部は、2018年1月に輸血部・感染制御部・病院病理部と協同してISO15189の認定を取得しました。これにより、我々の報告する検査結果が国際標準に則ったものであるお墨付きを頂きました。今後もこれに驕ることなくサービスと質の向上を目指して日々精進していきたいと考えています。



生体検査室の様子



生理機能検査センターの様子

～大学・病院を支える笑顔豊かなスタッフ陣～

「Smile ～スマイル～」では、大学・病院で活躍する職員の笑顔にスポットライトを当てて、各部署における活動内容や取組みなどについて紹介いたします。

在宅看護学

在宅看護学領域は3名の教員で構成されています。在宅看護学は、統合科目に位置し、ヘルスプロモーションと家族看護学を基盤として、病いや障がいがあってもその人なりの健康を主体的に生きるあらゆる年代の方と家族を社会生活者として理解し、その人・家族らしく生活できるように、生活史や価値観に添い、社会資源を活用し生活習慣に合わせ、自己実現や生活の質の向上を当事者とともに目指す看護です。

学部教育では、2学年次に「在宅看護学概論」、3学年次で「在宅看護学援助論」、4学年次で2週間の「在宅看護援助実習」を訪問看護ステーションや多機関で実習し、多様な在宅看護展開を学んでいます。講義・演習・実習では、一貫して当事者参加型や学生間の学び合い・ケアの創造性を大切にしています。

教員たちは、在宅ターミナルケア、高齢者・障がいをもつ方の権利擁護、生活困窮者への生活・健康支援、災害時要配慮者支援や災害対策、高齢者の施設ケアについて、活動や研究を行っています。近隣地域の訪問看護ステーションの方々とともに訪問看護の研修会「すみれ会」を約20年間実施し、年間3、4回の学習会・交流会に参

加しています。

また、訪問看護認定看護師の方々とともに「さくら会」を立ち上げ学習会を行っています。本学部又は近隣で日頃から活動及び研究交流のある大学教員とその卒業生とともに、新卒あるいは若手訪問看護実践者との学習会を年間1、2回開催しています。

今後ますます地域包括ケアの充実が求められる中、当事者のニーズに応え在宅ケアシステムの発展に寄与できる教育・研究に取り組んでいきたいと思っています。



学外講師の方々と集合写真



学ぶ楽しさを知る機会を与える教育

内科学講座（内分泌・代謝内科）・教授（特任） 高木 潤子

【医学教育のグローバルスタンダードを目指して】

私たちは診療の場において、しばしば確定診断が困難な症例を経験します。いわゆる疑い例が非常に多く、詰め込み型教育で得た単純知識だけでは、問題解決に至りません。医学において、グローバルスタンダード（GS）教育が目指しているのは、患者を診る能力をもつ人物を、世に送り出すことではないでしょうか。欧州では、医師はprofessional thinker（考えるプロ）であるべきという意見があります。曖昧な領域をどのように整理して解決に導くか、そのためには、思考力を磨くことが必要条件として求められるのだと考えます。

内分泌・代謝内科を学ぶ上で必要な基本的姿勢は、思考力を磨くことです。これができる人物が医師を志したなら、資質的に不適格とみなされることはまずないでしょう。GS教育の方法論は、一人の患者を全人的観点からしっかりみることです。私たちは、この様な意識を学生と教員が共有し、体験と議論を通して、学ぶ楽しさを知る機会を与える教育を目指しています。

【世界に発信する医学研究】

私たち大学病院の臨床医の使命の一つは、日々の臨床から汲み上げた疑問や知見を、研究で解明していくことです。内分泌・代謝領域の診療には、常に新しい症例や知見との出会いがあります。そのため当診療科では、日進月歩の領域である遺伝医学・医療に、特に力を注いでいます。同一疾患を有する家系において、表現型を有するまた有さない複数名の血液由来DNAが複数得られたとします。すると昨今では商業ベースで網羅的に、全ゲ

ノム又は全エクソンの塩基配列を決定して候補遺伝子を特定することが可能です。更に、基礎医学教室等との共同研究で着目した遺伝子バリエーションの生化学的機能変化を解析したり、遺伝子改変動物を作成したりすることで、候補遺伝子が真の原因遺伝子かを実験的に検証することができます。希少疾患の病態生理解明がcommon diseaseの診断治療に寄与し得ることは歴史的事実です。このような背景において、新規遺伝疾患家系の発掘は重要課題と考え、現時点で萌芽的研究成果を得ています。また、次世代教育は必須です。遺伝カウンセリングを含めた臨床遺伝診療を専門的にを行い、最前線の遺伝医学をキャッチアップできる人材の育成に努めます。専門家として将来羽ばたく若い教員や海外からの留学生だけでなく、研修医、学部学生諸氏と遺伝医学・医療の面白さを共有できることを目指します。

【講座からの一言】

我々は、患者さんを疾患カテゴリーに分類し、医療経済的なリスク対効果比を重んじた医療を行います。臨床医が最大公約数に対する最良の医療を行う発想をとらなければ医療経済が崩壊するのは一面の真理ですが、国際水準からみて専門医の名に恥じない医師を目指すのであれば、リサーチマインドを持つことも大切です。結局は患者利益に繋がるでしょう。兼ね備えは簡単にはできませんが、志を同じくする者が集い、お互いに刺激を与えつつも日々助け合えば達成されると考えます。皆様のご理解、ご指導、ご鞭撻を宜しくお願い申し上げます。

規 則

規則の制定・改廃情報をお知らせします。

学則の一部改正

愛知医科大学学則の一部が改正され、令和2年度及び令和3年度における、医学部の愛知県地域特別枠入学の募集人員を、令和元年度までに引き続き10名とするための整備がされました。

施行日は令和2年4月1日

学部長規程の全部改正

愛知医科大学学部長規程の全部が改正され、学部長候補者の選考方法等が改められました。

施行日は令和元年9月30日

「総合学術情報センターの組織等及び部門長の選考等について」の一部改正

令和元年9月1日付けで「総合学術情報センターの組織等及び部門長の選考等について」（学長裁定）の一部が改正され、研究業績の収集、管理及び運用に関する業務が、ICT支援部門から図書館部門に移管されました。

この改正に伴い、同日付で「総務部事務分掌について」（法人本部長・事務局長裁定）が改正されました。

放射線障害予防規程の制定等

放射性同位元素等による放射線障害の防止に関する法律(昭和32年法律第167号)その他関連法令の改正に伴い、次の関係規則が整備されました。

【新規制定】

- ・愛知医科大学病院放射線障害予防規程
施行日は令和元年8月20日
- ・愛知医科大学病院特定放射性同位元素防護規程
- ・愛知医科大学病院特定放射性同位元素防護委員会運営細則
施行日は令和元年9月1日

【全部改正】

- ・愛知医科大学医学部附属総合医学研究機構核医学実験部門放射線障害予防規程
施行日は令和元年8月1日

【一部改正】

- ・愛知医科大学附属病院放射線安全委員会運営細則
施行日は令和元年9月1日

【廃止】

- ・愛知医科大学病院放射線障害予防規程
廃止日は令和元年8月20日

看護学部履修規程の一部改正

愛知医科大学看護学部履修規程の一部が改正され、試験の際の不正行為に対する罰則が見直されました。

施行日は令和2年4月1日

病院規程の一部改正等

病院にがんセンター及びゲノム医療センターを設置するため、次の関係規則が整備されました。

施行日はいずれも令和元年10月1日

【新規制定】

- ・愛知医科大学病院がんセンター規程
- ・愛知医科大学病院がんセンター運営委員会規程
- ・愛知医科大学病院ゲノム医療センター規程
- ・愛知医科大学病院ゲノム医療センター運営委員会規程

【一部改正】

- ・愛知医科大学病院規程
- ・愛知医科大学病院副院長規程

「医療事故等の公表に関する指針」の一部改正

令和元年9月17日付けで「医療事故等の公表に関する指針」（病院長裁定）の一部が改正され、医療事故等の公表基準が、国立大学病院の基準に準拠して見直されました。